

少年の主張

平成22年度最優秀賞

『家族に対する思い』

八百津東部中学校3年
伊佐治 里帆さん



「ただいま～」
「お帰り！」

私が家に帰ると、いつも返ってくる祖母の声。昨年、少しの間その声が返ってこなくてとても寂しく、不安でたまらなかつた時がありました。

昨年、私の祖母は足を痛め、何度か入退院を繰り返していました。家族みんなが心配し、お見舞いにも何度か一緒に行きました。本当なら、毎日でもお見舞いに行きたかったけれど、少し離れた病院だったので、仕方ありませんでした。

あの頃は、ふと気づくと、いつもいてくれるはずの祖母が居なくて「おばあちゃん、元気かなあ。」と心配になりました。

けれども、いざお見舞いに行くと、ベッドで横になっている祖母の姿を見ると、私は声をかけることができませんでした。それは、急に何を言ったらいいのかわからなくなったし、なぜか緊張をしてしまったからです。

しかし、そんな私に祖母は、「大丈夫？元気にしとったか？」と、行くたびに声をかけてくれ、とてもうれしかったです。心が温かくなりました。

本当は、祖母は1人で入院してきつと寂しいだろうから、私から声をかけて安心してもらいたいの、うまくできない自分が無性に腹立たしく思えました。祖母が家に居なかつた数日間。私は祖母の存在の大きさがわかりました。祖母が家に居てくれることで、私は安心感を得られていたことに気づきました。

今、祖母は家で生活していますが、足だけでなく腰も悪くなってきているようです。カーペットなどのほんの少しの段差でもつまずいてしまうようで、転びそうになったことがあります。けれども、最初は「なぜ、そんな所で・・・？」とありました。だから手を差しのべることは無かったです。なぜならば私にとってその段差は危険なものではなかつたからです。

けれども、私は中学校1年生の時の総合的な学習

の時間にお年寄り体験や、部活動でひざを痛め、足を上げ難かつた時のことが思い浮びました。

祖母が足腰を悪くし入院がきっかけで、祖母の存在の大きさや、私達家族への心遣いを知りました。そして、私自身が自分の立場でしか物事を考えていなかったことに気づきました。だから、私は家族のことについて考えました。

私の家は、両親と姉が2人、そして祖母の6人家族です。一番上の姉は大学に進学しているので離れ離れですが、時々電話がかかってくるので話ができます。言葉には恥ずかしくて出さないけれど、とてもうれしいです。下の姉は高校生で、私の愚痴を聞いてくれたり、沢山話したり、同じバレーボール部なので時々アドバイスをしてくれます。また、両親は毎日家族のために働いてくれています。そして疲れて仕事から帰ってきてすぐに、私の部活動や学習塾のために送り迎えをしてくれます。

私は、改めて家族からたくさんの方の安心と安らぎをもらっていると感じました。そして沢山の時間を私のために使ってくれていると思いました。

私は3年生になってから特に心がけるようになったことがあります。それは、きちんと感謝の気持ちを伝えることです。

例えば、両親に部活動や学習塾へ送ってもらったときには「お願いします。」「ありがとう。」を伝えるようになりました。時々ケンカをしまい、話し難い時もあるけれど、それでも自分のためにしてくれているのだから、気持ちは言葉で伝えるようにしています。

来年は高校へ進学し、更に多くのことで家族には助けてもらわなければなりません。まだまだ迷惑をかけてしまうことばかりだけれど、身近なことで家族を支えられるようになりたいです。

最後に、お父さん、お母さん、愛加姉ちゃん、実咲姉ちゃん、おばあちゃん。いつも私を支えてくれてありがとう。これから、もよろしくお願ひします。